

大槌町とは

第1章

気候や地理、産業などの特色から大槌町を紹介。
縄文時代までさかのぼるこの町の歴史をひもとき、
かつて襲来した津波についても触れる。



町の西端に位置する新山高原しんやまはレンゲツツジの名所。背景は風力発電の風車



■ 総面積

200.42km²

■ 人口

11,766人

2019年5月末日現在

■ 震災前の人口

16,058人

2011年2月末日

東日本大震災前の大槌町

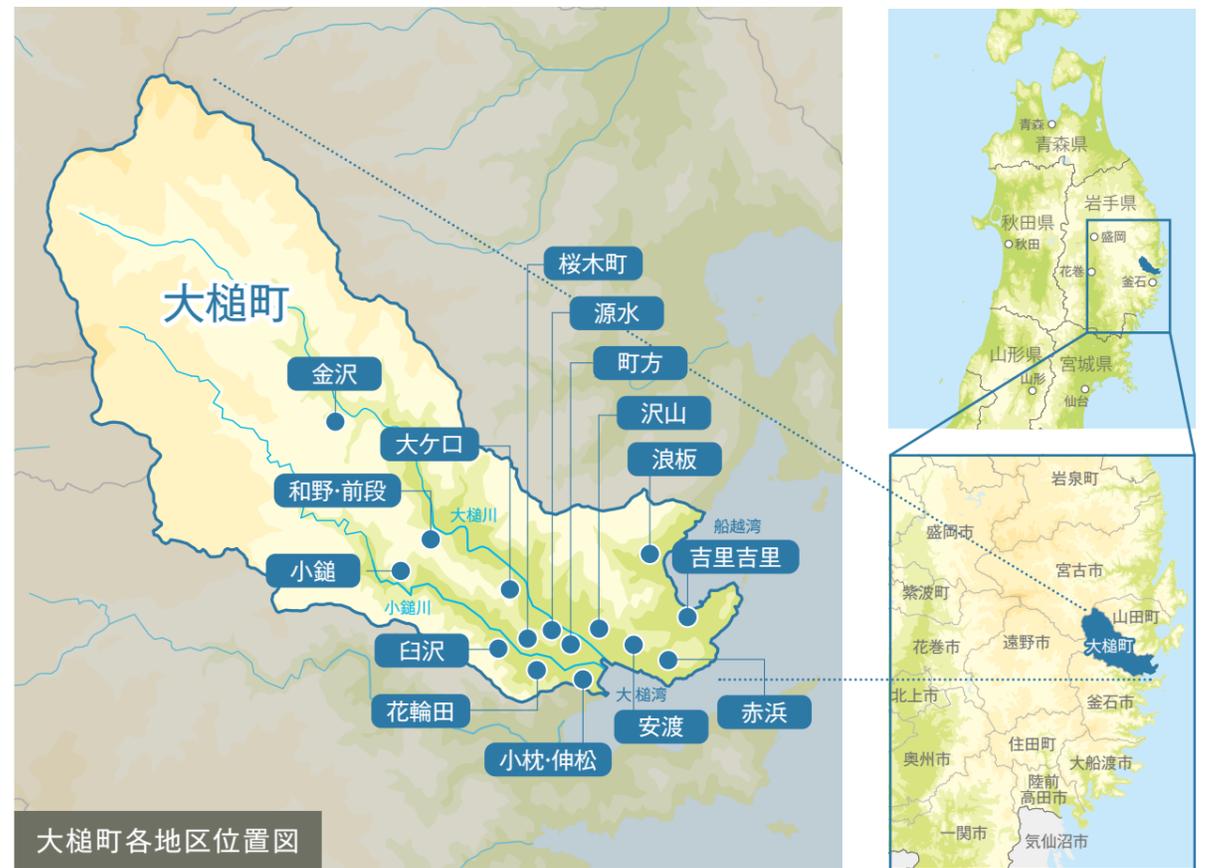
太平洋に面し 豊かな漁場

大槌町は、岩手県の沿岸南部に位置し、北は山田町、南は釜石市、西は宮古市、遠野市と接しており、東は太平洋に面している。町の総面積は200.42平方キロメートルで、総人口は1万1766人(2019年5月末日現在)を数える。町域の大部分を北上山系から成る山岳が占めており、東南の太平洋へ開く大槌湾に注ぐ大槌川、小槌川の両河川の土砂が堆積してできた平野を中心に市街地が形成されている。

太平洋に面した町の東側は、北の船越湾、南の大槌湾と共にリアス海岸が発達し、沖合では親潮と黒潮が交差する豊かな水産資源に恵まれた漁場となっている。また景勝地としても活用され、その海岸風景は、岩手県沿岸北部から宮城県気仙沼付近までを範囲とする三陸復興国立公園(旧陸中海岸国立公園)の一部として指定を受けている。海水

盛んな水産業や 複合農業

町の基幹産業は現在も水産業であり、サケやマス、スルメイカ漁などの沿岸漁業を中心にワカメやホタテガイ、カキなどの養殖漁業が震災後早々と復活した。また大槌川・小槌川沿いから山間地に至る金沢・小槌方面では水稲を中心に野菜やシイタケ、花き、畜産などを組み合わせた複合経営が行われている。



大槌町各地区位置図

町の歴史

縄文、弥生の遺跡点在

大槌町の歴史については、古くは縄文時代にまでさかのぼることができ、各時代の特色を示す遺跡も数多く存在し、縄文時代早期の土器などが出土する崎山弁天遺跡や弥生時代の住居跡が発見された夏本遺跡、そして奈良・平安時代の製鉄遺跡として著名な櫛沢遺跡などが点在する。当町の歴史は、中世に入り繁栄の礎を築いたといえる。

1334(建武元)年、阿曾沼氏の一族、遠野次郎(後に大槌氏を称す)が沿岸治世のために遣わされ、当地を拠点として築城したのが大槌城であった。天然の要害といわれる大槌城は1437(永享9)年、三戸南部氏の大軍による攻撃を受けたが、堅固さを強みにこの危機を脱し、以後、南部氏の影響下で三陸の水産資源などを大いに利用して栄えた。



海水浴客でにぎわう震災前の浪板海岸(2007年8月撮影)

代官所置かれ沿岸の中心に

しかし、江戸時代に入り、その繁栄に脅威を感じた南部藩は1616(元和2)年、時の城主大槌孫八郎政貞を大船建造などの罪状で捕え自害させ、嫡子三徳丸をも仕置きし、大槌氏の約280年も続いた隆盛は幕を閉じる。その後、藩は城代

を置き、1632(寛永9)年、大槌代官所が設置され、沿岸28カ村の政治、経済の中心地として栄えていく。中でも、吉里吉里善兵衛こと前川善兵衛は代々にわたって、この三陸はもとより、藩の産業経済にも大きな役割を果たし、後に「海の豪商」「みちのくの紀ノ国屋文左衛門」と呼ばれるようになった。

官所制度は廃止され、それに伴い大槌代官所も解体され、一時、江刺県治下に置かれた。1889(明治22)年4月に地方自治制が公布されると、大槌村、小槌村、吉里吉里村を合して大槌町となり、1955(昭和30)年には隣村の金沢村と合併し、現在の大槌町が誕生した。

繰り返す津波災害

大槌町は、豊富な水産資源の恵みを受ける一方で、明治以降、2度の三陸大津波(1896年、1933年)やチリ地震津波(1960年)などの大きな自然災害に見舞われている。2011(平成23)年3月11日に発生した東日本大震災の大津波でも多くの人命を失い、壊滅的な被害を受けた。この震災から既に8年の歳月がたつ今、大槌町は、各方面からの惜しみない支援と町民のたゆまぬ努力によってさらなる復興の歩みが続けている。

過去の津波

明治三陸地震津波 1896(明治29)年6月15日

総人口7,027人のうち
死者/599人
総戸数1,172戸のうち
罹災/526戸

明治29年 津波被害(安渡)

37年後

昭和三陸地震津波 1933(昭和8)年3月3日

死者/39人
行方不明者/23人
家屋被害/倒壊225棟
流失397棟
床上浸水201棟
床下浸水122棟

昭和8年 津波被害(大須賀)

27年後

チリ地震津波 1960(昭和35)年5月24日

震源地/チリ
地震発生から23時間後、三陸一帯に津波到達
罹災者数/6,542人(死者0人)
家屋被害/全壊36棟、半壊187棟
流失44棟、床上浸水345棟

昭和35年 漁船木材が散乱(雁舞道)

8年後

十勝沖地震津波 1968(昭和43)年5月16日

漁船、漁具、養殖施設など約3億円の被害

43年後

東日本大震災津波 2011(平成23)年3月11日

死者/870人 行方不明/416人(うち死亡届出数415人)
震災関連死/52人 家屋被害/全壊・半壊一部損壊4,375棟

年表

縄文早期	崎山弁天遺跡(吉里吉里)から早期末ごろの尖底深鉢土器出土
奈良・平安時代	夏本遺跡から8世紀前半の住居跡を発見
869(貞観11)年	巨大地震が起き、陸奥国を大津波が襲ったと伝えられる
1334(建武元)年	大槌氏が大槌城を築城したとされる
1611(慶長16)年	三陸沿岸大地震・大津波(大槌・津軽石で死者多数)
1616(元和2)年	大槌氏が滅亡したとされる
1632(寛永9)年	大槌城代を廃し代官を置く。大槌代官所が設置される
1692(元禄5)年	四日町(上町)の浄土宗見生山大念寺が開創
1706(宝永3)年	前川善兵衛2代富永、930両を南部藩に献金
1726(享保11)年	古廟山を開山した菊池慈泉が生まれる
1738(元文3)年	第7代南部藩主・南部利視が大槌巡見。前川善兵衛宅に宿す。この時の巡見で安渡浦を巡航し、珊瑚島を蓬萊島と名付ける
1753(宝暦3)年	日光東照宮修復のため、前川善兵衛4代富昌、藩から御用金を命ぜられる
1764(明和元)年	菊池祖晴が御社地に東梅社創建
1802(享和2)年	田鎖丹蔵が改良建網の「たんぞう」を完成させ、漁場開拓に乗り出す
1853(嘉永6)年	藩の悪政に対し農漁民らの一揆こる(三閉伊一揆)
1869(明治2)年	大槌通は江刺県治下に含まれる
1873(明治6)年	大槌郵便取扱所開設
1889(明治22)年	市町村制実施。小槌村・大槌村・吉里吉里村合併新大槌町となる
1896(明治29)年	大津波来襲(明治三陸大津波)。死者599人、損害高32万7千円余
1909(明治42)年	御社地に町営のサケ人工ふ化場が開設され、放流事業を開始
1923(大正12)年	大槌郵便局電話交換業務開始
1933(昭和8)年	大地震・大津波来襲(昭和三陸大津波)。波の高さ13尺。死者62人、流失倒壊戸数622戸
1945(昭和20)年	釜石、米国海軍の艦砲射撃と空襲を受ける。大槌町にも艦載機が襲撃
1955(昭和30)年	大槌町、金沢村と合併
1960(昭和35)年	チリ地震津波来襲。罹災者6,542人
1972(昭和47)年	国道45号全線開通
1981(昭和56)年	井上ひさし氏の小説「吉里吉里人」がブームに
1990(平成2)年	町制施行100周年記念式典
1997(平成9)年	第17回「全国豊かな海づくり大会」が天皇后両陛下ご臨席のもと開催
2005(平成17)年	米国フォートブラッグ市と姉妹都市提携締結
2011(平成23)年	東日本大震災発生

Episode file

～あのころの大槌～

若い世代が中心になって もう一度活気ある商店街へ



内金崎自転車商会
うちかねざき だいすけ
内金崎 大祐さん

大槌町のにぎわいを支えてきた商店街。そのにぎわいの中で生まれ育った内金崎大祐さん(44)は、東日本大震災で失われた商店街の再生に挑む。活気と笑顔を生み出すために。

― 昭和の商店街で記憶に残っていることは？

旧大槌町役場の近くには、二つの商店街があったんです。その一つは末広町商店街。昔は「横に長い百貨店」といわれていました。いろいろなお店が連なっていて、ここに来れば何でもそろそろ。だからそついうふうと呼ばれたのでしよう。私の所はかつて大町商店街という名前だったのですが、いくつかの商店街が合併して中央商店街という名前になった。たくさんあるお店の一つとして、うちの自転車屋がありました。子どもの頃の思い出ですが、浪板観光ホテル(現三陸花ホテルはまぎく)に年一回旅行一座が来ていて、商店街でポイントを集めると、

その一座の公演を見られるというキャンペーンもやっていましたね。あとは商店街で「よ市」とかも定期的にやっていました。

― 今と比べると、にぎやかな感じですか。

昭和の話ですが、今と比べれば、ずいぶんのにぎやかでしたね。商店だけじゃなく、飲み屋さんとかもあって、老若男女が楽しめる。そついう「社交場」的な部分も担っていたんです。用はなくても、お茶つこ飲みに来るんです。ここに来れば誰か知っている人に会えるだろうみたいな感じだったんでしょう。ただ、津波をきっかけにして、高齢で店を閉めてしまった人もいます。お店の数もだいぶ減りました。だから自分たちの世代が盛り上げていかなければと思っています。

― 商店街として新しい取り組みも始まったと聞きました。

自転車とカフェが融合したスタイルの「チャリカフェ」というお店を2018(平成30)年3月16日にオープンしました。時間がかかったけれど、元のお店があった場所に帰ってくることができました。今は月一回、「おしゃっち横丁」とい

うものをやっています。町文化交流センターおしゃっちの駐車場に屋台がずらりと並ぶんです。やっていることも楽しいし、お客さんに喜んでもらえる。何よりも町の中心部に人が集まってくるのがいい。まあ、いいことづくめです。今は中心市街地といっても、平日の昼間は人がほとんどいない。だから、こついうイベントが始まることで、人が集まる仕組みをつくっていきたい。ただ問題といえば、人は来るんですが、この「おしゃっち横丁」で完結してしまうこと。新しいお店もできているので、イベントに来たついでに、もっといろいろなお店にも行つてほしいと思う。次に目指すのは回遊してもらうこと。町の新しい魅力を見つけてほしいと思っています。

震災後は町の在り方も変わった。それもうがなないこと。こうなればいという理想はあるけれど、思ったとしてもそついう形にはならない。嘆いてもしょうがないし、現状に合わせた形にしていけばいい。そして、そのために自分ができることをやっていければと思っています。

(取材/2018年10月)